

浮世絵館だより

藤沢市
藤澤浮世絵館

2023年
1月
WEB版

藤沢市
藤澤浮世絵館
2023年
藤澤浮世絵館カレンダー
A2サイズ両面 250円
絶賛発売中!!

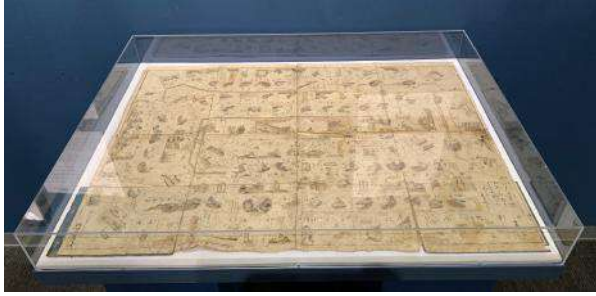
サイは投げられた 江戸の絵双六おもしろヒストリー

藤沢市藤澤浮世絵館では、絵双六を百点近く所蔵しています。絵双六の種類は、幾つかの主題に分類できますが、当館が所蔵する絵双六の多くは、「東海道双六」といって、東海道の旅路を絵双六にしたものであり、道中には藤沢宿や江の島がマスに描かれています。他には、明治時代以降の双六や、双六を収納していた袋も所蔵しています。今回の展示では、そうした数々の双六をテーマごとにわけ、四つのコーナーのうち、三つのコーナーで紹介しています。

振り出しをスタートに上がりを目指す ルールは今と同じ

下の写真は、藤沢市が所蔵する絵双六の中でも出版年代が判別できるもので一番古い絵双六です。右下の振り出しである江戸日本橋から、東海道の宿場を巡りながら、中央の上がりである京都御所を目指します。

作者不詳「新板道中名処双六」安永4年(1775)



左下にある「藤沢」を示すマスの拡大図です。かすれていてどのような絵柄であったのか判別できませんが、双六の状態から大切に遊ばれ、保管されていたことが伺えます。▷



江戸の大人も子どもも みんなで困んだ絵双六
日本は、五、十八世紀まで「双六」とは、「盤双六」のことを指しました。盤双六とは、サイコロをふりマスの目のある盤の上で複数の石を移動させたり、その数を競ったりすることで勝敗を決める二人用の遊びです。書物や絵画には日本人が盤双六に取り組む姿が描かれています。江戸時代中期になると盤双六は廃れ、安価で庶民的な絵柄や内容の紙製で作られた

の娯楽として定着します。絵双六は、江戸時代ではどのように遊ばれ、扱われてきたのでしょうか。現在の双六と同じでしょうか？ それとも現代にはない特徴もあるのでしょうか？ 身近な遊びだからこそ謎が深まる双六の世界をお楽しみください。

絵双六は遊んでいるうちに汚れたり破れたり、捨てられたりしてしまう消耗品でした。所蔵の中には、状態が美しく保たれている作品もあれば、絵や文字がかすれて解読ができない作品もあります。今日まで残っていること自体が貴重なのです。



溪斎英泉「東海道五拾三駅名所古跡略記道中双六」文政年間(1818-30)前期

た「絵双六」が生活に定着していきます。絵双六の起源ははっきりしませんが、室町時代にはすでに生まれていたとも考えられています。当時は「仏法双六」が主流で、上がりとなる極楽浄土を目指す様式が一般的でした。その後、博打や遊びの要素を取り込みながら、多様な主題が絵双六となって流通します。そして、子どもも大人も楽しむ民衆

旅した気分を味わう 道中双六の楽しみ

「道中双六」

とは、各地を巡る旅の道順を絵双六に仕立てたもので、伊勢参りや五街道を題材としたものが多く、東海道の道中双六が特によく作られました。道中双六の中には名所が組み込まれていることから、「名所双六」と呼ばれるものもあります。

江戸時代は街道が整備され、十九世紀には庶民も旅に関心を向けるようになり、ますが、実際に掛けられるのは一生に一度あるかないかでした。そうした中で、道中双六は庶民に旅の疑似体験を提供できる遊びとしても好まれます。道中双六は、途中で脇道に入り込ませたり、旅のアクセントで上がりや下りを阻止させたり等、簡単には上がりに行けないよう工夫をこらすことによって人々を楽しませました。



歌川広重「五十三駅東海道富士見双六」弘化2年(1845)頃

ピックアップ! 弥次喜多と巡る道中双六

「弥次喜多」は、江戸後期に出版された十返舎一九作『東海道中膝栗毛』に登場し、現在でもよく知られる有名な二人組のキャラクターです。その人気を裏付けるように弥次喜多を題材とした「膝栗毛物」、いわゆるリメイク作品が続々と出版されました。弥次喜多ブームは、絵双六にも影響を及ぼし、江戸時代後期から昭和期に至るまで、多くの絵師が描いています。絵双六の各コマは原作の名場面を上手くアレンジし



三代歌川国貞「東海道中膝栗毛滑稽双六」明治三十一年(一八九八)

基本的には東海道をたどるようにコマを進めていきますが、「膝栗毛物」ならではのマスもあります。振り出しが東海道の起点の日本橋ではなく、同じ江戸でも「膝栗毛」の主人公が住む神田八丁堀になっていたり、随所に物語と双六の内容を関連づけるような工夫がみられます。



たものが多く、弥次喜多のゆかいな東海道の旅をなぞるように体験することができます。

目が離せない!? ドタバタ珍道中を体験

笑う門には福来る 七福神の浮世絵勢ぞろい

展示のみどころは、絵双六だけではなく、開催時期が正月とも重なることから、おめでたい「七福神」が描かれた浮世絵も展示しています。江戸で身近な信仰の対象として親しまれてきた七福神は、浮世絵の題材としても人気があり、さまざまな姿で描かれました。左図では、おめでたいモチーフである宝船に七福神が乗っている様子が描かれています。



歌川広重「題名不詳(七福神宝船)」

担当学芸員からひとこと
双六大放出の展示です!
小さなコマの表現を間近でぜひ。

本展示は、2023年2月26日(日)まで開催しています。当館でこれだけ多くの絵双六を展示する機会もありません。現代の私たちの生活にも根付く絵双六を、それにまつわるおもしろヒストリーとともに楽しみください。